

特集「夕張の声を聞く」

座談会

夕張再生市民アンケート調査に参加して



8月17日から23日まで、本学経済学部生・教職員あわせて約30名と市民団体が合同で行った夕張再生市民アンケート実行委員会の調査報告は、夕張市への提出にとどまらずさまざまな方面から反響を呼んだ。この調査に参加した川村雅則准教授と学生の皆さんにecon.編集員の西村宣彦准教授をまじえて、この調査の現地での1週間を語ってもらった。

西村：昨年度（2008年度）は、川村、河西、西村の3ゼミ合同の地域研修として、夕張で調査を実施しました。今年度（2009年度）は、川村先生が中心になって地域研修の枠を超えて調査を実施されたわけですが、今回の調査の狙いを聞かせて下さい。学生の皆さんには参加のきっかけを聞かせてほしいと思います。



経済学部
西村 宣彦 准教授

川村：今回の取り組みには幾つかの目的がありました。最大の目的は、夕張市民のみなさんの暮らしの実態や再生に向けた声を明らかにして、それを再生計画に反映させていくこと。ですから、いいかげんな研究はできません。夕張への地域貢献という目的もありました。そして、みなさんたち学生の成長という教育上の目的もありました。

石上：夕張については全く知らなかったん

です。全然知識がなくて、しかもまわりは先輩ばかりで、きっといろんなことを知っているのではと、ずっと緊張していました。

川村：今回の取り組みは、学部を越えて、さらに学年も1年生から4年生まで。石上さんは1人だけ1年生で、高校を出て本当にまだ間もない、大学生活を半期ぐらいしか送っていない。そんな中で参加したという意味では、とてもドキドキだったでしょうね。逆に、先輩の立場としては内藤さんはどうでしたか。



内藤 泰葉さん
経済学科2年
川村ゼミⅠ

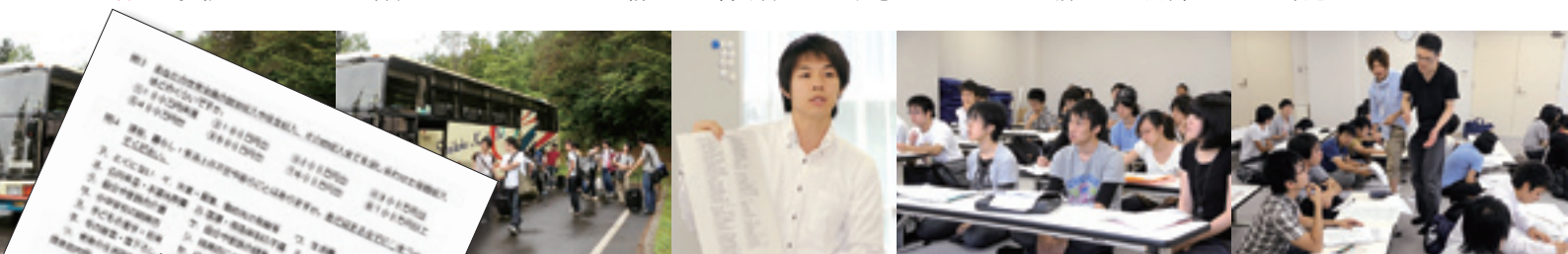
内藤：私も夕張についてはほとんど知らないという状態で、財政破綻した町というぐらゐの認識しかありませんでした。もちろん事前学習を行ったので、ある程度の知識は蓄えられたんですけど、でも本当に、その前までは何も知らない状態でした。

川村：確かに、私たちの研究テーマである雇用、労働についての話はある程度できて、夕張というこの地域の経済や医療、教育の問題などを把握して、どう改善していくかを考えるのは、大変だったでしょう。その点、3年生の野々川さんは、調査なども経験しているとはいえ、それでもやっぱり今年はかなりハードでしょうね。



経済学部
川村 雅則 准教授

野々川：そうですね。後輩から、今年も夕張に行くという話を聞いて、しかも去年が2泊3日の期間だったのに対して、「1週間つめ込まれるらしいんですよ」っていう話を聞いて、ずいぶんハードだなんて思う反面、すごく楽しそうだったので、うらやましくて。それで、私も、何かいい経験ができればと思って2年連続で参加しました。ただ、やはり2年生のときに経験した2泊3日と1週間とは全く違いました。しか



* 調査報告書

「はじめにー問題意識等」より——川村雅則准教授

私のゼミナールでは、2004年から毎年、夕張で、本学の「地域研修」授業を実施している。具体的には、市役所・ハローワーク・商工会議所など関係機関を訪れ、夕張（旧産炭地）の歴史や地域の直面している問題について話を聞いたり、地域住民や小零細事業者から生活・暮らしの実態や事業経営に関する実態などを聞き取ったりあるいはアンケート調査活動などを行ってきた。その途中で夕張が財政再建団体入りするという事態に直面したが、引き続き夕張入りし、小規模ながらも調査活動を行ってきた。そのご縁で、今回の調査研究事業の依頼があった。

私たちは、財政学や行政学を専攻するものではない。とはいえ、私たちが実施しているフィールドワークの経験を役立てて、夕張に何か恩返しができるかとお引き受けすることにした。予想を上回る夕張の人口減少等示されるとおり、私たちも、夕張でのそれまでの調査活動等を通じて、現行の再建計画は、果たして夕張を再生させることが可能な内容なのか強い疑問を感じていたし、全国でも最高の住民負担で最低の行政サービスを強いられている夕張市民の暮らしの実態を明らかにすることは、必要な作業であると考えた。

夕張再生市民アンケート調査報告書 2009年11月 夕張再生市民アンケート実行委員会発行



も、調査の内容についても、去年の自営業調査では、自営業を営んでいる方々から、事業経営の厳しさなどを中心にお話を聞かせていただいた、それこそ、まだ私たちのゼミの研究テーマとも重なっていました。今年、本当に幅広い内容のお話を聞きましたし、家に上がりこんでお話を聞くという体験がとても貴重でした。

川村：聞き取り調査ってとても大変なんで



2008年の地域研修(夕張市)



2008年の地域研修(夕張市)

すよ。聞こうとしている、お仕事や医療・介護、あるいは生活全般についての知識そのものが聞く側になればならない。その上に、聞き取り調査という手法をマスターしていなければならない。

石上：そうですね。最初はあまり喋ってもえなくて。

どう質問したら回答しやすいかがわかって

いなかったんですね。何度かやっただけど難しかったです。それで、先輩を真似てなんとか頑張りました。

石上 千里さん

経済学科1年
浅妻基礎ゼミ



川村：ここが大事なところなんです。つまり、先輩の姿を見てね、すごいなあと真似をしようとする。それが後輩の成長につながると思う。逆を言うと先輩は後輩のお手本になろうと頑張る、相乗効果ですよ。そういう意味では、学年さらには学部も混ぜてゼミを行うことの意義を感じましたね、今回の調査では、30数人の学生と教職員が参加しましたのでね。さて、話しを変えて、今度は、聞き取り調査を通じて感じたことや、経験したことなどを教えてもらえますか。私がお会いしたケースでは、例えば老老介護のケースがありましたね。しかも、奥さんに介護が必要なんです。お金かかるからと介護保険を使っておられなかった。あとは、雪かきの大変さが繰り返し語られたのが印象に残っています。高齢の単身女性のケースです。私が調査で思ったのは、暮らしを支えている様々な条件が、少しずつ、少しずつ蝕まれていっている事実。そういう実態をきちんと把握して必要な政策を提起したいと思って調査をしました。みなさんの方ではどうでした？

野々川：ある団地に行ったとき、ちょうど町内会のお年寄りの会のような会合が会館でひらかれていたんですよ。それで、ま

あまちはあがっていきなさいって言われて、昼ごはんまでごちそうになって。その後も、どこから来たの？年齢はいくつ？大学生は偉いね、っていう世間話で。調査表もほっぽりだして、くだけた感じで、「実際、夕張はどうなんですか。財政破綻で生活が苦しいという話は新聞などでよく目にするんですが、こちらの団地のみなさんはどうなんですかって」っていう感じでお話できました。そのとき、多くのみなさんから言われたのが、ううん、まあこんなもんでしょっていう感じの回答だったんですよ。この地域にずっと長く住んでいるけど、大変もたかが知れているし、まあこれぐらいで一家やっていける。なんとか生活はしていけているから問題ないよっていう感じで。そのとき思ったのは、私たちは外から来ている人間なので、表向き、大変だ大変だとはすぐには言えないかなということ。あとは、みなさん団地内のことを本当にいろいろ詳しく把握されているんですね。例えば、「あそこのおじいちゃんは今もうこの時間で薬を飲んだら帰っちゃう。でもあそこの人なら町内会のことについてこれこれ詳しいよ」っていう感じで、一つの団地の中でのコミュニティというものを感じたんですよ。世間では孤独死の問題が深刻ですが、こうしたつながりの強い団地ではそういう問題も防げるのかなって、



野々川 華奈さん

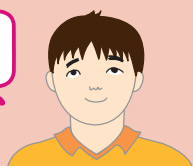
地域経済学科3年
川村ゼミII



夕張問題ABC

地域研修を履修しようと考えている板橋君。よくニュースで話題になる夕張市の問題をゼミの西浦先生に聞きました。

地域研究に興味のある板橋君



夕張問題に詳しい西浦先生



板橋君(以下、板橋)：僕が高校生の時に、よく夕張市がテレビに取り上げられていたのを覚えています。

西浦先生(以下、西浦)：財政再建団体になることが決まって、成人祭が開けなくなるかもってということで、ワイドショーで大きく取り上げられたね。みのもんたも来た。

板橋：財政再建団体になるというのは、民間企業という倒産みたいなものですか？

西浦：そうだね。ただ民間企業と地方自治体では、いろいろとルールが違うんだ。

板橋：どう違うんですか？

西浦：民間企業だと支払いができなくなったり、借りたお金を返せなくなったらアウトだけど、自治体は赤字の額が一定規模に達したら財政再建団体になるんだ。

板橋：財政再建団体になるとどうなるんですか？潰れることもあるのでしょうか？

西浦：自治体は、学校やゴミ収集、道路の維持管理など、僕らの生活や企業の活動に欠かせない役割を担っている。だから簡単に潰すというわけにはいかない。

確信ではないんですが、そういう印象は受けました。

川村：ここも大事なところですよ。つまり、地域に学生が受け入れられて、じっくりお話を聞くことってすごく大事な経験なんですね。



今回も1週間という期間で、学生が地域に受け入れられ、逆に励まされて帰ってくる。そのことが次の勉強へと向かわせることになる。非常に良い経験をしたと思います。

内藤：そうですね、私も野々川さんと一緒に調査していて、いまの事をすごくしみじみと思いました。あるお宅を訪ねたとき、雨が降っていて、入りなさいって家にあげてもらったんです。すごく床がきしんでいて、普通にじゃ歩けないぐらい傾いていて、ほんとに老朽化が進んでいる家だったんですけど、そこは70代のご夫婦と息子さんがひとりの、3人で暮らしていたんですよ。足がとても悪いお母さんにしたら床が傾いていてすごく不便だなんて感じました。

川村：自宅にあげさせていただくことの意義を感じさせる話しの内容でしたね、今のは。つまり、調査研究において対象者の自宅にあげさせていただくのは、交流という意味でももちろんのこと、そこでの暮らしの実態をまさに眼で見るという点でもとても大事なことです。そういう意味でも実は訪問調査ってホントに大事なことなんだよね。来てもらって話を聞くっていう方法もあるけれども、その人の暮らしを

トータルに把握しようと思ったら、やはりお邪魔することが大事。

石上：私が印象に残っているのは、40代ぐらいの娘さんが、1人で、ご両親とお姉さんの介護をしている家庭を訪問したことです。まずドア開けたら、その方が泣かれていて。あ、これはまずいかなと思って、「すいません、帰ります」って、帰ろうと思ったんですけど、「いえ、話を聞いてほしい」って言われて、家にあがらせていただいたんです。そしたら、入院されているお父さんの体調が急に悪化してそれですごく泣いて暮らしているということ。もう調査どころじゃなくて、それこそ、



ずっとその方の話を聞くだけで。それにしても3人の介護を1人で担当するというそのご苦労は、本当にすごかったです。

川村：うーんなるほどね。いまのお話を聞いて、調査の限界の検証の必要性をふと感じました。というのは、調査で市民の暮らしの大変さを明らかにしたと思いながらも、じつはこんなケースもありました。親を介護している一人息子さんのご自宅を訪問した際、ちょうど介護の最中だったので、「ごめんね」って言われて、調査はできなかったんですよ。そういう方々は少なくないのかもしれない。つまり、我々がお会いできたのは全員じゃないですよ。もしかしたら、生活が大変な人ほどこういう調査から漏れている可能性があるんだよね。その意味ではまだまだ調査の方法とか

も含めて考えなきゃいけないのかな。自分達はどこまで明らかにし得たんだろうっていうことの厳しい検証が必要かもしれない。ところで、今回のような現地での聞き取り調査も含めて、大学生活では、学生にこうしたいろいろな経験の機会をつくってあげることが大事だと思っているんですが、高校での勉強と大学での勉強の違いとか、もし何か感じたことがあれば。

石上：高校では現地調査などはやらないので、今回、実際に夕張に行く経験は、正直いって驚きでした。

川村：大変だったと思うけど、本当に良い経験をしてもらったかなって思っています。

内藤：大学で何をやるのか長い間悩んでいたのですが、実際大学に入って勉強を試みたら、違いました。そして、どの大学に入るかじゃない。自分がやりたいことを大学で見つけられるかがすごく大事だとあらためて気づいた。その意味では、この大学



に入って、素晴らしい先生方に会えて、これをやっているのを見つけてくれることが出来たかなってすごく思います。

川村：紙面1頁分を埋めるぐらいの熱い語りでした（笑）。1年生から2年生になる時に楽なゼミという基準で選んでいる学生もいるみたいですね。でも、はじめはそれでいいかもしれないけど、2年間それだと逆に苦痛だと私は思う。そういう意味では、私たちの取り組みは、文字通りカタチとして残ったよね。いろいろなところで今これ



板橋：じゃあ、借金をまけてもらえるとか？

西浦：そういう仕組みもないんだ。とにかく国の管理下で、赤字をゼロにしないといけない。そのために財政支出をぎりぎりまで削るよう求められるし、住民負担も引き上げることが求められる。

板橋：大変ですね！ でもそもそもは夕張市がムダ遣いをしたから、赤字が膨らんだんですよね？自己責任！？

西浦：結論を急がないで、歴史を振り返ってみよう。夕張市は、1990年頃にはすで

に財政破たんも同然だったんだよ。1990年は「炭都」と呼ばれた夕張市から、すべての炭鉱の灯が消えた年でもある。

板橋：僕は夕張という「メロンと映画祭のマチ」というイメージですが…。

西浦：国の政策で炭鉱閉山が進められて、夕張市は急激な経済衰退と人口流出に直面した。そんな中で当時のカリスマ市長が、観光事業で地域衰退を必死に食い止めようとしたんだ。市の借金は瞬間に膨らんで、借金返済が財政を圧迫した。

板橋：そして1990年頃には財政破たんも同然になったわけですね。

西浦：その通り。でもそのときは財政再建団体にならなかったんだよ。

板橋：って、いいんですか？

西浦：地方財政制度の抜け穴を使って、赤字が表に出ないようにしたんだ。赤字になれば、これまで取り組んできた観光事業も止めさせられることになるからね。国も黙認してたと言われている。

板橋：そしてどんどん赤字が膨らむことに
[次ページにつづく]

(***報告書**)が使われている。具体的な地域貢献をみなさんは達成したんだよ。

西村：夕張市は今、財政再生計画を作っているんですよね。巨大な借金を返しなから、ただ借金返すだけじゃなくて、これからどんな町をつくるかを考えようってことで、みなさんの調査も計画作りに生かされたと聞いています。皆さんから、夕張にどんな町になって欲しいと思うことはありますか。お年寄りが多い町なので、人口は次第に減っていきます。いろんなお宅をまわったと思うんですが、例えば、計画案には、古い住宅を、空家になっているところも多いので、一つの地区に集めていこうという構想があります。それは買い物が便利になるとか、いい面もあると思うんだけど、ただ環境が変わるとね、健康面で影響がでたり、近所付き合いが変わってしまうといった心配もあります。そういうことや、どんなことでもいいんだけど、今後、夕張はどういうまちづくりを進めていけばいいのだろう？皆さんの視点から、感じたことがあれば聞かせて下さい。

野々川：まだ具体的ではないし、夕張の実態をまだまだきちんと把握できていないんですが、先ほど言ったように、今回の調査では、夕張のコミュニティの強さを感じたんですよ。それってやっぱり、旧産炭地の助け合いの精神みたいなこともあるよって地元のの人に教わりました。その意味では、つながりの土台っていうものがきっとその土地には根付いているんだと思うんです。だから、その上の部分ですよ。つまり、その上に何を積み重ねていけばいいのかということで、その具体的な姿はまだよくわ

からないんです。去年行った時には、先ほどのコンパクトシティの話もありましたが、他にも、産廃処分場やカジノを誘致して地域を活性化させようという話も聞きました。でも今回行って、それって、夕張の実態とは合っていないんじゃないかなって



思ったんです。今の夕張の人のつながりを大事にしながらどんな政策が必要なのか考えるんですけど、まだよくわからないです。

川村：そうだね、そういう市民の連帯感とか信頼感とかをもったコミュニティが存在するわけだから、あとはそれを壊すことのないような計画が必要だね。いわゆる迷惑施設を引っ張ってきてうんぬんというのはちょっとなじまないように個人的には思う。喧々諤々しながらも、進む方向を自分達で決めていくことが必要なんだろうね。ただそれには、やっぱり国や道の支援が不可欠になってくるとは思います。

内藤：野々川さんが言ったように、コミュニティっていうのか、人とのつながりがすごく重要になってくると思うんですよ。夕張全体で町を作るってことです。住民同士の結束が強い夕張ならいいまちづくりができるんじゃないかって思ったんですよ。住民と一緒に、市長も一緒になって町作りをしていくっていうのはすごく重要なことだっていうふうに思いました。

石上：ただ、高齢者の方からは、「夕張再生なんてもういいんだよ」、っていう声も聞かれました。なんか寂しいというか、町をよくしようとみんなが思えるようになれ



ばと思いました。

川村：ある意味、道や国から締め付けられている側面があって、なかなか希望がもてないんでしょうね。夕張が今後どうなっていくのか心配の声は私もよく聞きました。道や国の支援が無ければ投げやりになるその気持はよくわかるな。だからこそ、本当に希望をもってそこで暮らしていけるようにするための再生計画なり、道や国の支援が必要だと思います。

西村：これからも皆さんと一緒に、夕張の再生を見守り、様々な形で支援できればと思います。今日はありがとうございました。



西村先生が司会を務めた夕張まちづくり集談会 (2009年10月4日 夕張市)



なったということですね。

西浦：さすが板橋君。赤字が膨らんだ歴史的経緯を見ると、複雑な政治的・経済的要因が絡んでいて、短絡的に夕張が悪いと決めつけられないと僕は思うね。

板橋：何だか、サスペンス・ドラマみたいですね。夕張は今、どうなってるのですか？

西浦：必死に赤字解消に取り組んでいるよ。ただ市民や市職員の我慢も限界に近くて、「夕張市には住み続けられない」とマチを出ていく人も、あとを絶たないよ。

板橋：人が出ていけば、ますます、財政再生は難しくなるんじゃないですか？

西浦：そうなんだ。夕張市は今度、新しい法律に基づく「財政再生団体」になるんだけど、それに合わせて、市民が希望を持って住み続けられるように、計画を作り直しているよ。

板橋：それに役立てようと、アンケート調査を行った



地域の問題を考えることは、とても楽しいですよ。



んですね。新しい計画は市民に希望を与えるものになってほしいですね！

西浦：本当だね。「財政の再生」が、本当の意味で「地域の再生」につながるものになってほしいね。

板橋：今日はありがとうございました。